

## 国語 その一（八枚のうち）

次の文章を読んであとの質問に答えなさい。

※この文章は、作者青木玉が女学校に上がった昭和十八（一九四三）年、十四才の時の経験をもとに書かれている。作者の祖父は明治を代表する作家、幸田露伴であり、母（露伴の娘）の幸田文も作家である。母の文は実母を八才で亡くした後、幸田家の厳しいしつけを受けて育った。なお、文中「お延ちゃん」とあるのは、祖父、露伴の妹である。

十二月の始め頃、伊豆の知合から人づてに産物が届けられた。正月を控えて大粒の蜜柑、\*前裁もの\* 茨豌豆、生椎茸、今では一年中売られているが、その頃は特別に心がけて送られた\*はしりの品であった。祖父は伊豆を好み、気候温暖で湯の恵みもある。加えて海にも土地にもよい物が育つ、善き物が生り出する土地だから、出ず（伊豆）と言うのだ。この福をお延ちゃんにも分けてあげるように、と母に命じた。母はその日のうちに特別のお客様などの折に材料を用意してもらった材料屋に電話を入れて、気の利いた御進物向きの品を頼んだ。

翌日、土曜の午前中の授業が終って帰ると\*お勝手の配膳台の上に、竹かごに青い檜葉が敷かれ平貝が盛り上った身を揃え、手前に寄せて椎茸、茨豌豆が取り合わせられ、籠をどけると下は粒よりの蜜柑が並んでいた。

「きれいに出来たわね、午後から母様紀尾井町へ行くの」  
考えなしに言うのと、

「今日はあるが行くの、御飯がすんだら、そのままいいからお使いに行きなさい」  
「え、一人で行くの」

「荷物はあなたの手に余るから、春さんに持ってもらいなさい、あなたは叔母さんにお目にかかって御挨拶して来るの」

とたんに胃袋に石が詰って、御飯は半分しか食べられない。普段してはいけないと叱られるが、見付からないようにお茶をかけて流し込んだ。慌てて髪をとかして三つ編みにするが緊張のため手が冷えて指がぎごちなく上手にゆかない。母は後ろに廻って編みかけの髪を、

「離しなさい」

と取り上げ、ざっと一気に解き直して毛筋を通し、二つに捌いてぎゅっぎゅつと編み、ぎりつとゴムを巻いた。同時にこつちのみぞおちも固くなった。

前へ廻って真正面に坐った。

「\*お口上は何て言うの」

と聞く。そんなことは考えてもみない、降って湧いたお使いの命令だ。

「何をつて、あの伊豆から蜜柑やなんか来たので、おじいちゃまが叔母さんそこへ持って行くようにつて」

09	受験番号
中	

## 国語 その二（八枚のうち）

「そういう甘ったれたお喋りみたいな口の利き方ありますか」

「はい」

「あんたは何てぼんやりしているの、この春進学した時、叔母さんからお祝い頂いたでしょ」

「ええ」

「ええじゃないでしょ、はいでしょう」

「はい」

「で、何て言うの」

「あの、お祝い有難うございましたって」

「違う」

びしゃつとなった。何が違うのか、何と言えはいいのか、いよいよ解らない。仕方なく、

「ごめんなさい」

必死にこらえて謝った。

「だまってないで早く」

「何て言えはいいか解らないの」

「だったら、何故、お教え下さいと言わないの、聞きもしない頼みもしない人に何を教えるの、頼まれなきゃ教えられないじゃないの」

「どうぞ教えて下さい」

もう無茶苦茶だった。どれもこれも私が頼んだ事じゃない。お祝いだって、お使いだって欲しかったり、行きたかったわけではない、何でこんなに叱られなきゃならないのか、手をついて、

「お願いします」

と言ったときり我慢も限界、せき上げてしまった。目の前に手拭が降って来た。

「ぐずぐず泣いてないで顔洗って来なさい、さっさとしなきゃ日が暮れちゃう」

母の追及は緩まない、顔を洗って坐り直し改めて、お願いしますと言った。

「お口上は、入学の折にはお思召かけられ、誠に有難うございました。頂きましたものは母が要に備えて

使わせて頂くと申して居ります。本日は伊豆から前裁ものが届きましたので、心ばかりのもの取り揃えてお目にかけるよう、祖父から申し付けられました。どうぞお納め下さい。でお辞儀する、さあ言ってごらんお口上は——」

一節ずつ区切って母の言うにシタがつて誦える。三度くり返して、

「行きなさい」

春さんは家へ野菜や卵などの行商に来る谿淵と呼ぶおやじさんの姪ッ子で畑仕事が好きでない。堅いお宅で行儀見習いをしたいと、夏の終り頃から来た、気のいい娘だった。私より四つ五つ上だっただろうが、母の拵えた御進物の包みを抱えて、外へ出るのが嬉しくてにこにこしている。こっちはお口上が

09	受験番号
中	

## 国 語 その三（八枚のうち）

あるから間違えては一大事、落語の馬鹿婿よろしく入学の折には——頂きましたものは——本日は伊豆から——頭の中で\*エンドレステープを廻しつつ、麴町紀尾井町へ行つた。

大叔母さんのお宅は、赤坂を上つて永田町の手前を左へ折れて行く、道のどちら側も宮家やら由緒あるお屋敷が並ぶ中にある。塀の中に入ると正面に車寄せがあつて左側に箱型の黒い自動車が止っている。音楽堂からとぎれとぎれにピアノの音が聞えている。右手に内玄関、細くあけられている塀ぎわを奥へ行く、春さんはすっかり気圧されて、

「玉子さん、そんなに奥へ入っていつて怒られないんですか」

とおどおどして止つてしまう。言われればこつちだつて心細いが、玄関などでごたごたしては、どんな面倒が起きるか知れたものではない。勝手口こそ、本丸に近いのだ。引き戸の前で、

「御免下さい。小石川の幸田から使いに出ました」

と声をかけた。中は静まり返つて、ここまではピアノの音も聞えない。しばらく間を置いてもう一度声をかけようとした時、戸のすぐ内側から控え目な返事があつて、戸を開けて家政婦の吉沢さんが顔をのぞかせた。

「まあ、小石川の玉子さま、よくおみえになりました。ささこちらへどうぞ」

と茶の間の叔母さんの坐る前の席にきれいな座布団を出して勧め、ちらつと時計を見て、

「もう間もなくお稽古が終りますから、ここでお待ちになつて」

お勝手に棒立ちになつている春さんは上り口の火鉢のそばに座布団をあてがわれて休ませてもらった。

どこかの部屋の時計がウエストミンスターチャイムの時を告げている。やがて音楽堂の方から軽い足音がして襖が開き、

「おや玉ちゃん、よく来ましたね、兄さんはお元気かい、そんなに固くならずには楽しんでいいよ、座布団お使い」

座について吉沢さんのすすめるお茶を手に、叔母さんはこちらへ気をつかつて話しかけられた。ふっと胸のあたりが楽になつて、手をついて、

「おばさま御機嫌よう、今日はお使いで参りました。お口上は」

と言いかけると、叔母さんはこちらの顔に目を止めたまま、お湯呑を卓の上に置いて手は膝の上にぴたつと決つてお口上を述べ終るまで\*塑像のようになられた。お辞儀をして頭を上げると笑顔があつた。

「確にお口上伺いました。兄さんにお福分けにあずかり有難うございます。喜んでいと申し上げておくれ」

持つて来た包みを進めると、ひらいて叔母さんも、そばの吉沢さんも声をあげた。

「まあ、綺麗に取り合わせてあつて見事なこと、文ちゃんお手際だね、お母さんに私から特別によろしくと伝えてちょうだい」

母の満足気な顔が目に見えて嬉しかった。

09	受験番号
中	

## 国語 その四（八枚のうち）

「さて、この身の繋しまったたいらぎ（平貝のこと）は何にしても美味おいしかろうね」  
叔母さんと吉沢さんは、今夜これをどうして食べようかと話している。

「バタ焼きはいかがです、椎茸のソテーもおいしゅうございます。あの、お宅様ではたいらぎはどうなさ  
つて召まし上りますか」

吉沢さんはとんでもない質問をした。

なる程、我が家の料理の仕方を聞けば、露伴先生と同じようにして叔母さんに食べさせて上げることが出来るわけだ。その上どう扱あつかおうかと思おもい悩なやむ手間もハブけるといふことか。が今夜の献立こんだてなど聞いては居ない。何時いつもの祖父のお膳ぜんの上を思い浮べた。織部おりべの紅葉もみぢ型の皿、厚目に包丁を入れたたいらぎがさつと焙あぶつてあつて割醬油わりしょうゆが掃はいてある。あれはどうか。

「割醬油のつけ焼きか、フライにしたのもおじいちゃま好きです」

「なる程、そうだねえ、でも私はこんなに新しくいいのだからお刺身さしみで頂いただきこうかね、さやも茹ゆでて」

長居は無用、これ以上変なことを聞かれては堪たまらない。

「母が待つて居りますので」

お辞儀をして台所へ出た。来た時から目に止っていた猫が、さつきと同じ場所で香箱かうばこをつくつて寝ねている。吉沢さんに、

「なでてもいい？」

と聞くと、

「好きですか」

と抱え上げて渡わたしてくれた。ねむい目の猫はおとなしく抱かかれている、薄うすねずみ色の縞しまがあるきれいな大ネコだ、柔やわらかくてあつたかくてふにやふにやっている。思おもわずなで廻まわして喜よろこんでいると、叔母さんが、

「玉子は猫が好きかい、お家うちにいないのかい」

「はい、おじいちゃま嫌いですから」

「ああそうか、じゃあそのうち私からお願ねがいしてみようかね」

「いいえ、いいの、そんなこと言いったら叱なぐられるから」

猫を元の籠の中へおろしながら、

「あの、又またなでに来ていいでしょうか」

と聞いた。履はきものは内玄関に廻まわしてあつた。

「気をつけて帰るんだよ」

送り出されて、弱々しい冬の陽差ひざしがかげりかける中を都電にのつて、何かへまはしなかつただろうか、猫をなでたりしていけなかつたかなあ、でもあの猫可愛かわいかつたと取り止めもない思いを持ったまま揺ゆられて帰った。

何時もより早目に祖父の夕食が始まっていた。

09	受験番号
中	

## 国語 その五（八枚のうち）

お使いから帰った挨拶に行く。手をついて、

「唯今ただいま帰りました。紀尾井町の叔母さん、御元氣おげんきでお福分けを頂き喜んでいとお伝えするようにとのことでした」

「そうか、お延ちゃんは機嫌がよかったか」

「はい、たいらぎが新しくておいしそうだからお刺身にして召し上るっていらっしやいました」  
後ろに母が来て坐りながら、

「ああやっぱ叔母さん美味しいものよく御存知ごぞんじだ、生なまで上るって、そりやよかった」

と嬉しそうだ、見たところお膳の上うへにたいらぎは乗ってない、母についてお勝手に下って、

「おじいちゃまはどうやって食べたの」

「ポン酢ぽんすで上ったよ」

「ふーん、たいらぎは生に限るか」

と言うと、

「そうさ、新しければ」

母は機嫌よく笑った。

次の日、叔母さんから電話があつて、昨日の御使いものへのお礼があり、

「玉子も少し大人おとなの会話が出来るようになりましたね」

おナなサさけけの及第点まうたいてんが告げられた。

一日過ぎてもあの出がけの母の叱り方を思い出すとやっぱ訳がわからず気が滅入る。大人って何て面倒なことするんだろ、入学の時のお祝いはその時言っただけではいけなくて、たまたま伊豆から物が届けられたのをきっかけに、見立みだてのあるように拵もてえて、ぼんくら娘をお使いに出して御礼言上ごんれいごんじょうをさせてテストしたわけなのだ。さしずめあの御使いものは、受験料か、何だか大人の世界の多重くわじゆうコウこうゾウぞうを垣間見かひまた思いがして重さがじんわり感じられる。

「ああ、やだやだ」

声に出して言ってみて詰らなかった。ぼんやり叱られたことを思い返して、母さんは利口だから私みたいに叱られやしなかったんだろうな、どうだったのだろう、はっと解ったように思った。きっと幾いくつものテストが行われ、実力をつけていったに違いない、そして何の時か解らないが\*信州のおばあちゃんおばあちゃんは、

「聞きもしない娘に教えることは出来ない」

と言ったのではないか、その淋さびしさ頼たりなさ、どうしていいか解らない目の前の困難を\*生なまさぬ仲ななという荷を背負って母はどうやって乗り越えていったのか、我が身の気楽さに引きくらべて、うなだれる重さがあつた。



09	受験番号
中	

国 語 その七（八枚のうち）

問一 「とたんに胃袋に石が詰って、御飯は半分しか食べられない」とあるが、それはどうしてですか。

問二 「我慢も限界、せき上げてしまった」とあるが、「私」はそれまでどんなことを我慢していたのですか。

問三 頂きました お目にかける おみえになりました 伺いました 召し上りますか について、次の問いに答えなさい。

(1) 「頂く」「お目にかける」「おみえになる」「伺う」「召し上る」を、ここでの使い方に合うように、敬語でない普通の言い方に直しなさい。

	頂く		お目にかける		おみえになる
	伺う		召し上る		

(2) これらの言葉は、(ア) 尊敬語 (イ) 謙譲語のどちらですか。それぞれ記号で答えなさい。

記号	頂く	お目にかける	おみえになる	伺う	召し上る
----	----	--------	--------	----	------

武蔵	受験番号
09 中	

国語 その八（八枚のうち）

問四 「長居は無用、これ以上変なことを聞かれては堪らない」とあるが、このときの「私」の気持ちを説明しなさい。

問五 「後ろに母が来て坐りながら、『ああやっぱり叔母さん美味しいものよく御存知だ、生で上るって、そりゃよかった』と嬉しそうだ」とあるが、母はどのように「嬉しそう」なのですか。

問六 「祖父はしまったとおでこを叩いて笑った」とあるが、祖父はどのように「しまった」と思ったのですか。

問七 文中のカタカナを漢字に直し、漢字の読みをひらがなで書きなさい。

ける	ハブける	んだら	スんだら
お け	おナサけ	って	シタがって
	コウゾウ	お	お手際